

『東方』三二〇号より

密度の濃い歴史の概説書

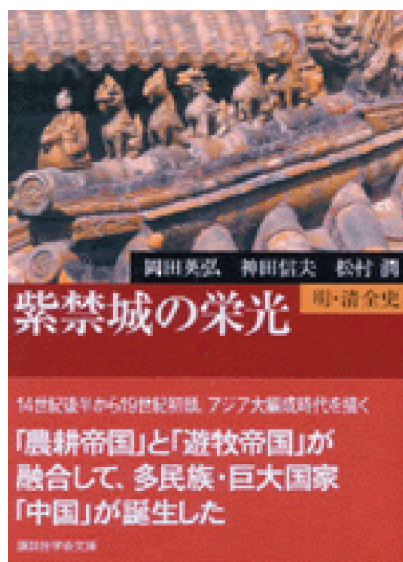
鈴木 真(筑波大学)

このたび講談社学術文庫の一冊として、『紫禁城の栄光——明・清全史』（本書）が復刊された。本書の親本は、一九六八年に文藝春秋社の大世界史シリーズの第十一巻として出版された同名書（ただし副題はなし）であり、岡田英弘・神田信夫・松村潤（五十音順）の三氏による共著である。復刊までの経緯および本書の読みどころ・加筆箇所等については、「学術文庫版まえがき」（楠木賢道・杉山清彦氏執筆）に詳しい。この「まえがき」も参考に、本書について紹介していこう。

まず著者と執筆方針について。本書の親本では、出版社の方針で神田信夫氏の名のみが強調されていたが、親本の「あとがき」（本書には未収録）で神田氏も述べているように、実際は岡田・神田・松村の三氏が各章を手分けして執筆したものである（三氏が『満文老檔』訳註の中心メンバーであり、その著しい業績によって日本学士院賞を受賞したことは周知の通り）。もともと単なる分担執筆ではなく、神田氏によれば「はじめ両氏とともに三人で構想をねり、それぞれ分担して執筆した原稿について、相互によく討論検討をくわえて修正し、定稿をつくった」とのこと。そのため本書は、分担執筆の概説書にまみえられるような、統一的史観の缺如といった通弊とも無縁である。しかも本文は平易かつ要諦を押さえた記述に貫かれており、一般の読者も難なく入り込むことができる。

トップページにもどる

岡田英弘・神田信夫・松村潤著
『紫禁城の栄光——明・清全史』
文庫判・三五二頁・講談社・一、一五五円



つぎに内容について。本書の『紫禁城の栄光——明・清全史』というタイトルから、読者は明・清両王朝の通史に思われるかもしれない。もちろんそれは間違いではないのだが、本書はことさらに「中国史」やあるいは「北アジア史」といった区分に基づいて執筆されたものではなく、両者が渾然一体となつて、ごく自然に融合したかたちでの叙述がなされている。モンゴルやチベットとの関係においても、明朝から見たアルタン・ハーン、清朝からみたダライラマ、ガルダン像ではなく、あくまでかれらはモンゴルあるいはチベットに立脚した視点で描写されているのである。むしろ「シナ」からの視点もまったく排除しているわけではないから、その意味では本書はきわめてバランスのとれた概説書であるといえる。ただ、モンゴルやチベットなど内陸アジアの諸勢力にも十分な紙幅が割かれているのは本書の特長であるといってよい。「紫禁城」という中華の中心地

をタイトルに冠しながら、その実本書は「周辺」（と見なされがちな）地域・集団にこそ描写の重点が置かれているのである。その理由は第一章「中国とシナ」で述べられている。すなわち空前の大帝国を築き上げたモンゴル帝国の支配領域のうち、明朝が受け継いだのは漢人の住む「シナ」の部分だけであり、満洲・モンゴル・チベット・トルキスタンを内包し現代につながる「中国」の完成は、清朝の登場を待たねばならない、という。とかく「シナ」と「中国」とを同一のものの異称として混同するむきもあるが、本書では両者を明確に区別して使用している。第一章の冒頭で宣言されているように、本書は「シナから中国への歴史」を叙述した概説書なのである。以下でその流れをかいつまんで紹介しよう。

四五〇年に及ぶ「シナから中国への歴史」は、明の洪武帝朱元璋の一代記により幕を開ける。明朝と、「シナ」を喪ったものの本拠地モンゴル高原に蟠拠するモンゴル勢力との関係をにらみつつ、当時の情勢を述べていく。また、洪武帝が権力を伸長させていく過程が詳しく述べられるとともに、紫禁城を含む北京城の観光案内もおこたらない。

つづいて視点はモンゴルに移る。モンゴルとオイラットの相克の原因となった伝説の紹介から始まり、オイラットの歴史を叙述する。「土木の変」などのお馴染みの事件で明朝が出てくるが、ここでの主人公はあくまでエセンである。エセンの次は、モンゴルを再統一するダヤン・ハーンの子孫アルタン・ハーンが主人公として登場する。明朝につづく清朝と、モンゴル諸部やジュンガルとの対外関係は、チベット仏教とダライラマの権威の問題を抜きにしては語れない。本書ではモンゴルとチベット仏教との関係を実に明快に整理して論述している。つづいて一七世紀に外モン

トップページにもどる

ゴルが清朝支配下に入った経緯を手際よく記述しているが、このあたりの記述はのちの類書にもおおむね受け継がれている。また、おりに触れて二〇世紀のモンゴル事情にも言及しており、歴史の連続性という醍醐味が実感できるであろう。

評者の関心に沿っていえば、第十章「康熙大帝」がとくに本書独特の指摘を含む。まず「玉葱」という意表をついた比喻によって、清朝政権の重層的な構造が明快に示される。そして清朝皇帝は満洲人・漢人・モンゴル人に対して支配権を確立しなくてはならないとされ、それぞれに君臨する指導者としての役割のバランスの必要性が説かれる。とくに八旗の構成員に対しては「皇帝は部族長会議の議長にすぎない」と断じられ、睿親王ドルゴンを中心に入関前後の清朝政権の内部が詳述される。ここで掲げられる「清初の諸王」と題された図は、アイシン・ギョロ氏の家系図であると同時に、八旗の連邦＝清朝政権の縮図になっていることに注意されたい。「八旗の領主はそれぞれ別の家系に属していたのであって、国政に関する重大事項の決定は、かならず各旗を代表するこれら諸王の会議でおこなわれなければならない」という一文は、初期の清朝政権のみならず、入関・北京定都以後も継続する八旗の支配原理である。

また、有名な康熙年間の皇太子問題についても、満洲族的視点から切り込んでいる。「満洲人の倫理では、主従関係というものは絶対的なもので、何代たとうが家来の子孫は主筋に対して忠誠をつくさなければならぬ」、「皇帝に対して忠誠をささげるのは彼の直轄の旗の満洲人だけで、他の旗のひとびとは領主たる皇子だけに忠勤をはげむ義務を負い、皇帝がどうなろうと直接の関心はもたない。八旗

の団結をたもっているのは、各旗の諸王と皇帝とのあいだの個人的関係だけである」という指摘、また康熙年間後半に皇太子の兄弟六人が八旗に分封されて以降、「各旗の満洲人たちはそれぞれあらたに自分たちの領主としてむかえた皇子をかついで猛烈な党派争いをはじめ」たという理解は、清朝の皇位継承問題の構造的な原因を看破したものである。あるいは、各旗の有力者が自旗の出身者を要職に押し込めようとして、「シナ」の官僚制度にまで食込んでいった事実を指摘し、清朝が満洲族の王朝であることの重要性を喚起する。これらの指摘は、複雑きわまる八旗の支配構造を、やや簡略化して述べたものではあるけれども、その本質を見事に衝いているといえよう。おりに触れて「満洲人社会」ということばが出てくるが、その内実をよく示し、かつ後の概説書でもしばしば引用されている的確なフレーズは多い。明朝を受け継いだ清朝がどのような王朝であり、どのようにして「中国」への道を辿ったのか。その問題と、清朝が満洲族王朝であったこととは切り離しては論じられない。本書を読めばその意を一層強くするであろう。そして清朝の紫禁城が、もはや単なる「シナ」の君主の住居ではなかったことは誰の目にも明らかとなる。

さて『紫禁城の栄光』というタイトルの本書は、雍正帝・乾隆帝の盛んな御世を描きつつ、清朝が広大な領域を獲得し、「中国」を完成させていく過程を記す。しかし次の嘉慶帝の時代、天理教の乱で紫禁城が賊徒に襲撃されるといふ衝撃的事件が発生する。そして欧米列強の到来を読者に予感させつつ、「だがそうした世界史の歯車の大きな動きになお気づかぬままに、すぎし日の栄光の夢さめぬ紫禁城の瑠璃瓦は、秋の夕陽に照りかがやいているのであった」という印象的な一文で、本書は幕を閉じるのである。

▶ トップページにもどる

以上、簡単な紹介を行なったが、評者が本書を評価する大きな理由のひとつは、単純に読書の愉しみを堪能できる点にある。およそ歴史の概説書というものは、一般読者を想定している以上読み物としての面白さも兼ね備えていなければならないが、その点に関して本書は申し分ない。広範な学識に裏打ちされた確乎たる史観が平易に説かれ、さらに朱元璋、ティムール、アルタン・ハーン、ヌルハチ・康熙帝・雍正帝・乾隆帝ら歴史上の英雄のエピソードが彩りを添える。まさに巻を措くあたわざる面白さである。その密度の濃さも含め、本書は歴史の概説書として無類の完成度を誇っているといえよう。

本書によって「シナから中国への歴史」に開眼した読者の中には、当該時期の歴史について一歩すすんだ関心をおぼえるかもしれない。本書末尾には、親本にあった「参考書目」に代えて、親本出版後に刊行された主要参考書籍の目録が附されており、初学者への手引きとしても有用である（先年亡くなった神田信夫氏をのぞき、岡田英弘・松村潤氏は現在も研究の第一線に身を置き、優れた業績を世に送り出している）。

今回の復刊を機に、未読の読者はもちろんのこと、すでに当該時期の歴史について一言をお持ちの方にも、一読（あるいは再読）をお勧めしたい。きつとあたらしい発見があるはずである。